

今年、七月初旬、急に手足に痺れが出て、歩きにくくなった。足を引きずるようになったので、近くの森山臨海病院に出掛けた。

今まで知らなかった病院であるが、本館1、別館2の大きな病院である。緊急の手術やそのリハビリに信望があり、最近めきめきと有名になったそうである。

担当の医師は、さっと私の患部を見て、

「明後日から入院するように」

と言われた。私は大丈夫かしらと思ったが、病院の構えや知合いの医師もいる事だしと、指定された日に息子に伴われて入院した。

その日から一週間は、検査、検査の毎日。大きな機械の中に身体が埋まるようにして、何回も何回も診断を受けた。

一週間後、

「今日で検査は終了です。頸椎を病んでいますので、痺れはそこからきています。お年を召しておられるので、無理には言いませんが、手術は必要です。なさいますか？」

と主治医の阿部先生ほか、三人程、医師が立ち並ぶ中で言われて、つられるように、

「お願いします」

と返事をしてしまった。

次の日、螺旋型の機械のような処に寝かされたが、それからの事は、まったく覚えていない。

気がついたのは、翌日だったろうか、身動きがならない程痛い。私自身は覚えていないのだが、手術後、首を安定させるために巻いていた首輪を、私は苦しがつていくつも毀してしまっただけである。このおばあさんにこんな力があるのかと、医師や看護師もほとほと困ったという。

以上は、手術に立ち会った人達から聞いた事であり、私自身はまったく覚えていない。しかし、それ以降、私には七十日余りの入院の日々が待っていたのである。

意識が戻ってから五日程たった頃、私は起こされて体操をさせられ、廊下を多分三百メートル位と思うが、午前、午後と杖を持って歩かされた。嫌も応もないのである。

作業療法士や理学療法士という人がいて、どんどん歩かされる。はじめは杖を持ってよいのだが、次第に杖は取り上げられ、更に辛いのは一、二段の階段を上らされる。これが恐くて、なかなか足が上がらない。

はじめは午前、午後と一時間半ずつあるこの時間が嫌だったのだが、日がたつにつれ、指導の人達が善い人が多いせいもあって、自分から運動場へ出て行くから不思議である。

何はともあれ、九月半ばに、来週退院という日が決まったときは嬉しかった。

しかし、歩くにはシルバーカーを使うように言われ、新しく購入した。退院までの一週間は、専らシルバーカーでの練習、街歩きをさせられた。

退院した私には少々手足に痺れは残るのだが、シルバーカーを操って買物をしに毎日、街中を歩いている。

「清紫会」だより

- ◆ 第146回 平成二十八年八月十八日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉市川茂子・止まった冷蔵庫／林博子・「もの」のかたち／松井淑子・道具の話
- ◆ 第147回 九月十五日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉林博子・あたり前の風景（エメンタール地方を旅して）
- ◆ 第148回 十月二十日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉市川茂子・困ったもんだ／大石久美・入院／松井淑子・どうでもいいこと

（松井）